

上郡町域の赤松氏関連遺跡の調査成果

島田 拓

たことは否めないだろう。

ところが、二〇〇〇年を境に状況は変化し始め、赤松氏関連遺跡の調査が、町内外で劇的に増えてきている⁽¹⁾。

兵庫県の南西部、県下で最も西に位置する上郡町は、室町時代の守護大名・赤松氏が世に名を興す契機となつた地として知られる。現在も、町域の北には「赤松」集落があり、赤松円心をはじめとする赤松氏は地元の英雄として讃えられている。しかしながら、その英雄像は『太平記』などの文献史料をもとに描き出されたものであり、実態としての赤松氏研究は、考古学の成果からは希薄なものしかなかつた。

上郡町は、「赤松氏の本拠地」と言われながらも、大きな開発に遭うことも少なく、長い間関連遺跡の調査が行われることはなかつた。その一方で、それが赤松氏研究を遅滞させる原因の一つであつ

まず、町営住宅の建設に伴い、山野里宿遺跡の調査が上郡町教育委員会（以後、町教委と略記）によつて行われた。その後、県道改良工事に伴い兵庫県教育委員会（以後、県教委と略記）が、ポンプ場建設工事に伴い、再び町教委が同遺跡の調査を行い、中世宿場町の一端が解明されつつある。次いで、赤松貞範が建立したとされる栖雲寺跡の測量および範囲確認調査が町教委によつて行われた。

そして、二〇一六年からはひょうご歴史研究室と町教委によつて、赤松居館跡の確認調査や史料調査が行われ、徐々にではあるが、考古学の分野

ある安室川との合流地点に位置し、現在のJR上郡駅の南西側に広がる中世の集落遺跡である。

二〇〇〇年の町教委の調査では、井戸や土坑、柱穴、流路を検出している。二〇〇四年の県教委の調査では、三十棟の掘立柱建物のほか、土坑や溝、旧河道を検出している。

出土遺物には、夥しい量の備前焼や土師器、瓦質土器、須恵器、青磁、輸入陶磁器などが出土している。また出土した瓦の中には、法雲寺と同紋の軒瓦が含まれている。

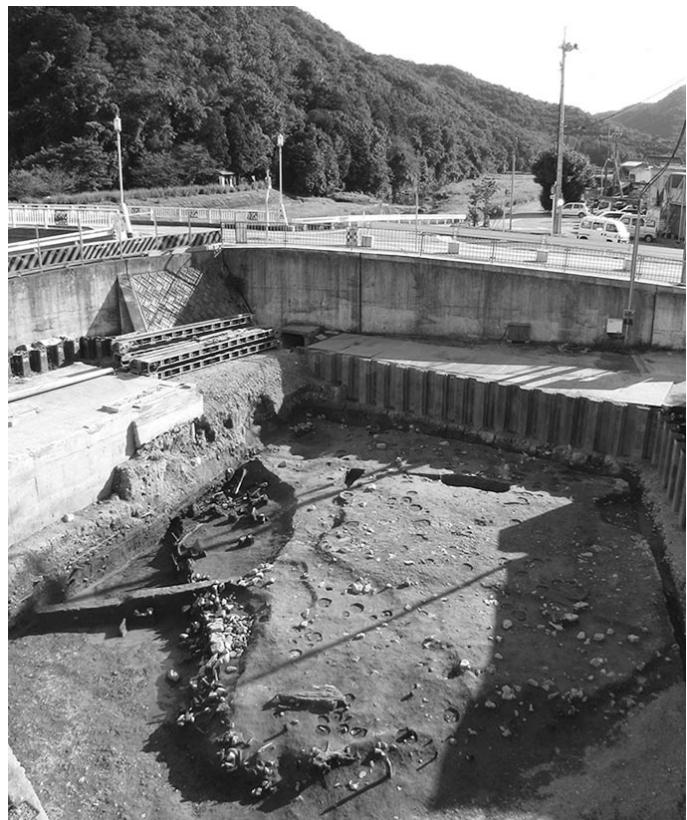


写真1 山野里宿遺跡調査区全景（北から）

からも赤松氏研究が進み始めたと言えよう。

しかしながら、現時点での町教委の資料の整理・公開が進んでいないこともあるため、本稿では、近年の赤松氏関連遺跡の調査成果について紹介したい。

二 山野里宿遺跡の発掘調査

山野里宿遺跡は、千種川中流域西岸部、支流で

二〇〇九年の町教委の調査では、多数の柱穴と土坑、また舟着場の遺構を検出している。おそらく集落東端の川湊と考えられる。舟着場は、流路に沿って木杭を打ち込み、それを細い枝で編み込むように補強し、舟を寄せ



写真2 山野里宿遺跡舟着場跡（北東から）

る一画だけ上部に人頭大の礫を配している。なお、舟着場の北側に桟橋と考えられる遺構も検出している。

出土遺物には、それまでの調査と同様に、大量の備前焼や土師器、瓦質土器、青磁などがある。特に土師器や瓦質土器の鍋など煮炊具の出土が著しい。また瓦質土器の中には大型の風炉があり、従前の調査成果と合わせて、集落内に寺院が存在した可能性が高い。加えて茶釜や茶瓶、茶臼なども出土していることから、茶の湯文化の浸透がうかがえる。さらに、龍泉窯系青磁碗や白磁、北宋銭や明銭なども多数出土しており、西播磨における一つの物流拠点であったと推測される。大半の出土遺物については、十五世紀後半から十六世紀初頭に位置づけられるが、中には十四世紀から十五世紀前半に遡る遺物も含まれており、長期間にわたって存続したと考えられる。

調査の結果、調査地が中世山陽道と千種川の結節地点という交通の要衝に位置しており、集落と川湊、また寺院の存在が考えられ、周辺の小字に「宿」が残ることからも、『大日本古文書』「城頼

連申状案』に記載のある「山里宿」であることは疑いないだろう。

三 栖雲寺跡の発掘調査

栖雲寺は、赤松円心の次男・貞範の発願により建立された寺院とされている。一九一八（大正七）年、岡山県勝田郡豊国村（現・美作市）の果樹園から「播州栖雲寺」「永和戊午仲夏（永和四年・一三七八年）」の銘がある梵鐘が掘り出され、栖雲寺



写真3 山野里宿遺跡出土備前焼

が播磨に存在していたことが想定されていたが、文献史料には一切登場しないため、実態不明の寺院であった。

高坂好氏は、白旗山西麓の踏査と聞き取りなどの実地調査で、地元で「せうじ」と呼ばれている畠こそ「栖雲寺跡」であると考えた⁽³⁾。

その後、宅地開発の波が押し寄せ、昭和五十年代に白旗山西麓も宅地化され、「栖雲寺跡」は消滅したかに思われた⁽⁴⁾。

ところが、近年、白旗山西麓登山口近辺の下草枯れが進行し、近畿自然歩道脇に大量の瓦の散布と建物の方形基壇痕跡が認められることが判明した。だが、ひとたび人目に付くようになると、採集者が後を絶たず、時には盗掘して軒瓦を持ち帰る者まで現れた。そのため、県教委と協議の上、範囲確認調査を行い、保護を図ることとなつた。

現況は、白旗山西麓の緩斜面から急斜面へと変化する傾斜変換点に位置しており、山裾に近接している。また西側へ向かって緩く傾斜するが、各所に直角に切土や盛土を行い、平坦地を造り出している。地元の古老の話では、かつては畠であり、

「せうじ」や「とうのもと」と呼んでいたとのことである。

確認調査にあたつて、瓦の散布が認められた基壇痕跡を中心に約二千平方メートルの範囲で地形測量を行つた。その上で、盗掘箇所を繋ぐ形でL字形の調査区を二箇所設定し、基壇各辺の端部を検出した⁽⁵⁾。

調査の結果、各調査区で礎石および基壇裾の外装の石組を検出した。礎石は基壇に直置きしており、樹木の根によつて原位置から若干動いている



写真4 栖雲寺塔跡全景（南西から）

と考えられる

が、東西約一

○五センチメー

トル間隔で三
間分を検出し
ている。

南北の礎石

については、

調査区内に柱

通りがなく、
柱間や間数は
明らかにでき
なかつた。ま
た、塔心礎は



写真5 栖雲寺塔跡北側の石積（北東から）

なる積み方を行つてゐる。

また、石列の周囲には雨落ち溝が設けられてい
る。雨落ち溝の底に石敷きは認められなかつた。

検出した基壇の規模は、一辺約六・九メートル
で、塔心礎が認められないことから、二層目以上
に心柱を設ける型式の塔であると考へられる。⁽⁶⁾

出土遺物

は瓦のみで
あり、土器

については
周辺で瓦質
土器茶瓶の
注口部を探
集しただけ
である。出

土した軒丸
瓦には、左
三つ巴紋と
右三つ巴紋
があり、左
三つ巴紋軒



写真6 栖雲寺瓦

基壇外装については、西側の調査区で石列を二
列検出しておる、西側を正面として見栄えを意識
したものと考へられる。なお、西側の石列は石材
の平坦面を西側に向けて並べるが、北側と東側、
南側の石列は一列のみで、ある程度面を揃えては
いるが、石材を小口積みにしており、西側とは異

丸瓦は外区に珠紋を配する。また、鳥衾が一点出土しており、左三つ巴紋を施している。軒平瓦は、波形紋と中央に菱形紋を置き両側に珠紋を配するもの、中央に菱形紋を置き両側の珠紋の周囲に唐草紋を施すものがある。加えて、鬼瓦の破片を一点採集している。外周部に竹管紋を施している。

特筆する瓦としては、相輪（九輪部）の破片を採集し、調査においても一点出土している。採集した相輪は、輪部から輻部の一部であり、出土した相輪は轂部であるため、相輪を据える建物が存在していたことは疑いない。

したがつて、調査で明らかとなつた遺構は、地元での呼称や遺物の面からも塔跡であることは間違いないく、高坂氏が突き止めたとおり、栖雲寺の遺構の一部であると考えられるのである。

四 赤松居館跡の発掘調査

赤松居館跡は、古くから赤松円心の屋敷跡として知られており、現在も小字名に「御屋敷」の地名が残っている。かつては旧赤松小学校・旧赤松

幼稚園として利用され、それ以前は江戸時代の村絵図から畠地であつたことがうかがわれるが、いずれの村絵図も「御屋敷」部分については蒲鉾状の区画で表現されており、地元では特別な場所と意識されていたと考えられる。

町教委では、ひょうご歴史研究室に協力し、二〇一六年から赤松氏と山城研究班に参加させていたとき、古文書や絵図等の文献史料の調査研究を進める傍ら、赤松居館跡の確認調査を実施し、文献史学と考古学の両面から、赤松居館跡の実態を調査することとなつた。

発掘調査を実施するにあたり、現況の地形測量を行つた。現在、健康広場および赤松の郷昆虫文化館の敷地はほとんど高低差がなく、北東から南西にかけてわずかに傾斜している。また西側には、斜面を削り、盛土を施したと思われる土壘痕跡が認められる。東側も同様の高まりが認められるが、現在は宅地となつており、現況では土壘であったかどうか確認できない。

「御屋敷」の北側は、約六メートルの崖面となつており、山麓部を削り出して平坦地を造り出し



図1 赤松居館跡地形測量図および調査区配置図

たものと考えられる。なお、江戸時代の村絵図には、平面形状が蒲鉾状に描かれ、ある程度デフォルメして描かれたと思われるが、現況では北側斜面が凸字形を呈している。凸字形の敷地の北東側及び北西側の段状地が極端に狭いことを考慮すると、この平面形状が「御屋敷」造成時から計画されていたとは考えがたく、後世に削り込んだものとみてよい。

発掘調査は、凸字形の北側に張り出した部分が、

いつ削られたかを確認する目的で、「御屋敷」平坦地の主軸に沿つて、南北方向に調査区を設定した（一トレンチ）。現況は畠地であるが、それが以前は小学校の講堂が建っていたといふこともあり、調査区の北側では現代の瓦や陶磁器が出土す



写真7 赤松居館跡1トレンチ遺物出土状況

るが、それ以前の遺物は皆無であった。また、地山を削り込んで石組み溝が構築されていた。年代については明らかではないが、石組が乱雑であり近世以降のものと考えられる。また、調査区南側では東西方向の溝を検出した。溝からは土師器皿が出土している。

一トレンチの南側の延長線上に設定した二トレンチでは、表土下で地山を検出しており、南側へ向けて傾斜していく。調査区の北側で柱穴を一基検出した以外は、遺構は認められず、調査区南半は小礫を含む整地土によつて整地され、遺物は認められないため、時期は特定できない。

二トレンチの調査で、南北方向にトレンチ調査を進めるこ



写真8 赤松居館跡5グリッド溝跡（南西から）

を探ることにし、「御屋敷」西側に八箇所のグリッドを設定した。

その結果、二・四・五・七・八の各グリッドで、黒褐色の整地層を検出し、二・四グリッドの整地層内には土師器皿が多量に含まれていることが明らかとなつた。

三グリッドでは、地表下約二十センチメートルで地山層に達したが、柱穴を三基検出している。

五グリッドでは、地表面から約一・一メートルで整地層下の遺構面を捉え、南北方向の溝を一条検出している。

また、最も西方の六グリッドでは、表土直下で遺構を検出しており、礎板を持つ柱穴を二基検出している。それぞれの礎板上面の高さに差があることから、別の建物である可能性が高い。

これらの調査成果から、「御屋敷」の現況は一見平坦地に見えるが、旧地形は細かな谷が入り組んでいたことが推察され、そこを整地して平坦地を造り出していることが明らかとなつた。また、礎板を用いる柱穴から、建物の造営に強固な基礎工事を行つてることが分かる。



写真9 赤松居館跡6グリット柱穴
(南西から)

五 おわりに

近年の上郡町域における赤松氏関連遺跡の調査成果について紹介してきた。徐々にではあるが、

考古学の分野から、赤松氏の実態を紐解く手掛かりを提示できてきてはいるものの、それもまだ緒に就いたばかりである。

今後、ひょうご歴史研究室の調査・研究の中で、文献史学と考古学の両面から、赤松氏の実態を解明していくことが可能であると信じている。

(1) 町外では、姫路市置塩城や坂本城など赤松氏に関連する遺跡の調査が行われ、報告・公開されている。

山上雅弘・中井均他編『置塩城跡総合調査報告書』夢

前町文化財調査報告書第六集（夢前町教育委員会、二〇〇二年）山上・南憲和他編『播磨置塩城跡発掘調査報告書』夢前町文化財調査報告書第七集（夢前町教育委員会、二〇〇六年）、南『赤松氏の城を調べて—置塩城跡・坂本城跡—』（姫路市埋蔵文化財センター、二〇一二年）、同『坂本城跡第十八次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第二十一集（姫路市教育委員会、二〇一三年）、小柴治子『坂本城跡第十九次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第三十集（姫路市教育委員会、二〇一四年）。

(2) 山野里宿遺跡の調査成果について、公表されてい

るものには以下のものがある。山田清朝「兵庫・山野里四ツ日遺跡」（『木簡研究』第二八号、木簡学会、二〇〇六年）、拙稿「兵庫・山野里宿遺跡（四ツ日地区）」（『木簡研究』第三〇号、木簡学会、二〇〇八年）、山田『山野里宿遺跡』兵庫県文化財調査報告第四〇五冊（兵庫県教育委員会、二〇一一年）、同「兵庫県上郡町山野里宿遺跡の調査成果について」（『中近世土器の基礎研究』三五〈日本中世土器研究会、二〇一三年〉）。

(3) 高坂好「赤松貞範と栖雲寺」（『中世播磨と赤松氏』（臨川書店、一九九一年）。

(4) 藤本哲氏は、開発によって削平された地点が栖雲寺跡としている（藤本『赤松円心』（講談社出版サービスセンター、一九七五年））。

(5) なお、測量調査では調査地の約二十五メートル北側に、一边約十一メートルの方形基壇を確認している。当初は仏堂との見解を示したが（上郡町教育委員会『栖雲寺跡発掘調査現地説明会資料』二〇一四年）、廟の可能性が高いとの指摘を受けたため、訂正しておく。

(6) 基壇発見当初から、方形状の高まりを確認していたため、塔跡であるとの認識の上で発掘調査を行った。しかし、調査時には、筆者の資料収集が追い付かず、

報道発表および現地説明会の際に、多宝塔の可能性を示唆した（前掲注（5）文献）。しかしその後、村上裕道氏により、二層目以上に心柱を設ける三重塔の可能性があるとの御教示を得たため、改めて提示しておきたい。